様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４５５８

研究課題名（和文）保育行為スタイルの分岐プロセスに関する縦断的研究

研究課題名（英文）A longitudinal study on the bifucation process of ECEC teachers teaching styles

研究代表者
上田　敏丈（UEDA, Harutomo）

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：６０３５３１６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、保育者の保育行為スタイルの分岐プロセスを明らかにする。そのために、初任者から中堅にかけての分岐に着目をするために、3年間の縦断研究を行った。研究協力者は、2名の保育士である。2016年から2018年の間、継続的に半構造化インタビューを行った。
　その結果、保育者は、3年間の中で、担任としてのプレッシャーを抱えつつ園文化から学んでいることと、特に同僚保育士の影響が大きく受けていた。保育行為スタイルの分岐に与える要因は外在的文化的要因が大きく影響していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は保育者の保育行為スタイルの分岐プロセスを、保育者自身が意味づける「行為の意味」を射程にふくめて検討した。特に、どのような園に配属されるのか、その園文化の影響と、初任保育者が共に働く年配の加配保育者との関係性が、保育行為スタイルに影響を与えていていた。これは、園文化が保育者の関わり方の価値観を再生産していることを明らかにしたものであり、今後、組織としての園文化の継承が重要な課題となる。

研究成果の概要（英文）： This study identifies the bifurcation process of child care teachers' teaching styles. A three-year longitudinal study was conducted in order to focus on the bifurcation points between beginning and mid-career child care teachers. The research collaborators were two child care teachers; between 2016 and 2018, a continuous semi-structured Interviews were conducted.
  As a result, the teachers were able to learn from the culture of the ECEC center over the course of three years, with the pressures of being a classroom teacher and learning from the culture of the ECEC center. Especially the influence of fellow teachers was significant. Extrinsic cultural factors were found to have a significant impact on the divergence of child care teachers' teaching styles It became.

研究分野：保育学

キーワード：保育行為スタイル　保育者の専門性　SCAT　発生の三層モデル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

保育者の専門性に関する研究の一つとして、保育行為を検討していくことはこれまで様々な視点で取り上げられてきた（例えば、梶田ら，1988；高濱，2000 など）。これらの研究では、保育経験の長い保育者ほど、それぞれの保育の場面に適した適切な指導やかかわりを行うことができるようになることが示されている。一方で、保育者の指導やかかわりの多様性を計量的に捉えようとした研究として、保育行為を分類しその頻度を測定しようとしているものがあげられる（例えば、小川ら，1978；田中ら，1988；芦田，1992 など）。その中では保育者によって、使用する保育行為の頻度に偏りが存在していることに言及されている。

このような保育者が保育を行う際の行為の偏りをティーチング・スタイル（teaching style）として、これまでの保育者研究の中で知見が蓄積されてきている（例えば、Louiser，1994；Mohanna，2008 など）。ティーチング・スタイルとは、「指導における個々人のアプローチの特性」（Hayers，1999）と定義されるが、申請者は特に幼稚園・保育所で勤務する保育者に適用して、「保育行為スタイル」と統一的に使用している（上田，2014 など）。

保育行為スタイルに関する研究として、第一に保育行為スタイルにはどのようなものがあるのかを主として計量的手法によって明らかにしてきたもの（Kruif ら，2000；関口ら，1985；渡辺，1979；上田，2008 など）、第二に、保育行為スタイルに影響を与える保育者の要因についての研究があげられよう。これらの先行研究の知見をまとめると、保育経験の長い保育者になるほど、適切な指導やかかわりの知識が増え、場面に応じた行為が選択できるようになるが、一方で、保育経験の長い保育者になるほど、同じような場面では同じようなかかわりを行うようになるという（中井，2003）相反するような知見がこれまで蓄積されてきている。このような相反する知見が生じている要因として以下のことが考えられる。

第一に、行為の頻度としてスタイルを捉えていることである。従来の研究では、観察やアンケートによって計量的に測定された行為から分類されたものが主である。だが、同じような行為であったとしても、初任者とベテランでは異なる理由から行っているのかもしれない。あるいはベテラン保育者は、ある場面に対する適切なかかわりがわかりきっているからこそ、かかわりの選択肢が少ないのかもしれない。従って、行為だけではなく、その行為を裏付けている行為の意味を研究の射程とする必要がある。

第二に、保育行為スタイルを固定的なものとして捉えていることである。上述したように、計量的研究が中心であった従来の研究において、保育行為スタイルは改善していく必要のあるものと捉えられてきた。例えば、中井（2005）は保育者の価値観と保育行為スタイルとの関係を明らかにした上で、これが新たな知識や指導論を組み入れる際の阻害要因となると述べている。だが、保育行為スタイルとは保育者がこれまでの保育経験の蓄積の中で、自らの価値観と日々の保育行為とを結びつけ生成したものである。保育者の保育行為スタイルが固定的であることの意味を問う必要がある。

２．研究の目的

そこで、本研究では、就労後３年目の保育者を対象として、３年間の縦断的研究を実施することで、日々の保育行為が自身の価値観と結び付き、保育者の保育行為スタイルがどのように分岐するのか、保育行為スタイルの分岐プロセスを明らかにする。

この問いに迫るために、本研究が依拠する理論枠組は次の通りである。

保育者がある場面でどのようにかかわるのかという保育行為は保育者自身の価値観と深く関係している（例えば、笠原ら,1997 など）。このような行為を裏付けている意味を含めて検討していくために、本研究では、ヤーン・ヴァルシナーの発生の三層モデル理論に依拠する（ヴァルシナー,2013）。三層モデルは、価値観と日常行為との間に両者を結びつけ媒介する中間層を設定した理論モデルである。この理論に基づくことで、日常の様々な幼児の状況から、保育者が必要な情報を取捨選択し、体系化された自身の価値観と結び付き再び行為へと戻るプロセスを描き出せる。

３．研究の方法

本研究の研究協力者は、愛知県内の公立保育園に勤務する２名の保育士（ミナ先生、マツリ先生、ともに仮名）である。２名の保育士は調査開始時、３年目であった。おおむね２～３ヶ月に１回を基本として、2016～2018 年の３年間、半構造化インタビューを行った。ミナ先生は公立保育園に配属後、0 歳児の保育を経験し、3 歳児を 2 年、4 歳児、5 歳児と担任している。マツリ先生は、配属後、1 歳児、3 歳児、4 歳児を 2 年、5 歳児と担当している。インタビューは、現在の保育の状況、上手くいったと感じる関わり、上手くいかなかったと感じる関わりを中心に、それぞれ約１～２時間行った。インタビュー実施回数は１６回である（３年目：６回、４年目：6 回、５年目：４回）。

二人の語りを何度も読み返しながら共通する語りについて、コーディングを行った。それを非可逆的時間の時系列と発生の三層モデルの位置付けを考慮しながら、保育行為スタイルがどのように分岐していくのかについて、複線径路・等至性モデリング（以下、TEA）を用い、図式化を行った。

なお、本研究は名古屋市立大学大学院倫理審査委員会の承認を得て行われている。

４．研究成果

本研究の分析結果を図１として以下に示す。

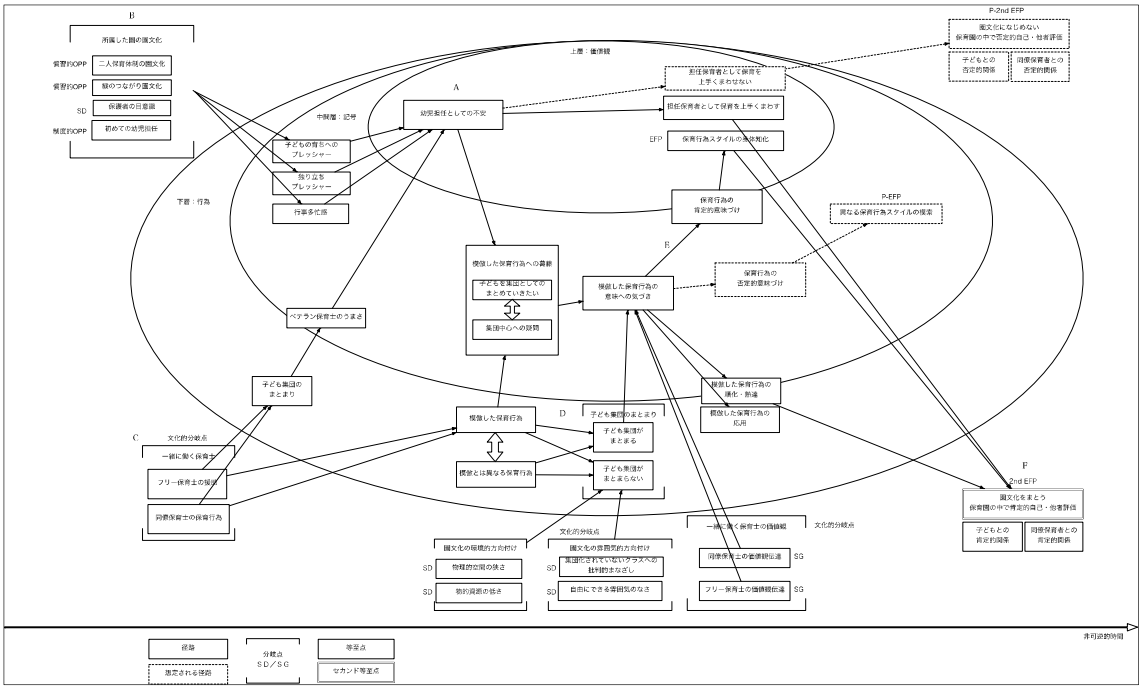

図１：保育行為スタイルの分岐プロセス

Ａ：幼児担任としてのプレッシャーと不安

ミナ先生、マツリ先生は、ともに２年目の年に初めて幼児担任を任されることになった。１年目は複数担任である乳児担任であった。そのため、基本的には先輩保育士の指導のもと、集団で保育を行うことができた。一方、幼児担任は加配保育士や補助の保育士が一緒に入るものの、一人が原則であるため、「一人で何でもぱっときめられる（ミナ、１回目）」が、「困った時に相談できない（マツリ、１回目」ため、不安が多い。特に乳児クラスと違い、幼児では「押し寄せてくる行事（マツリ、１回目）」のため、多忙感を極めていた。このような幼児担任としてのプレッシャーと不安を感じさせる要因として、二人の勤務する公立保育園での園文化があるだろう。

Ｂ：クラス担任を取り巻く園文化

二人の所属している公立保育園では、若手の幼児担任には、正規職員である担任と、非正規職員（臨時・パートなど）と二人体制で保育を行うことが多い。このような「二人保育体制の園文化」は慣習的必須通過点として存在しており、「いろいろ教えてもらうとかすごく勉強になる（ミナ、５回目）」一方で、「ズレがあったり（ミナ、５回目）」して関係をこじらせることにもつながっていく。

また、幼児担任の場合は、同じ３歳児同士のクラスで比較をされたり、「３歳から４歳へのつながり（ミナ、４回目）」を期待されたりするなど、園の保育として求められる子どもの姿に対して十分なことができないため、「経験値の差を凄く感じるからそれでまた落ち込む（マツリ、３回目）」こともある。また、一方で、３年目となり、園長や他の保育士からも「今年は巣立ちのときだね（マツリ、１回目）」と言われたり、一人前の保育士としての振る舞いを期待されたりして、独り立ちプレッシャーを感じていた。このように、３年目の二人は、保育園として園全体で求められている子どもの姿と周囲のベテラン保育士のうまさなど、さまざまな園文化からプレッシャーを感じ「幼児担任に対する不安」を抱えていた。

C：「一緒に働く保育士」からの学び（文化的分岐点）

二人は幼児クラスの担任であり、乳児クラスの時よりは自分で判断しなければならないことが多いものの、必ずしも一人で保育を行うわけではない。隣のクラス担任である保育士や、自分のクラスを補助するために入ってもらう保育士の存在が大きい。二人が所属する市では、一般的に正規職員はクラス担任を行い、数年ごとに転勤がある（本章ではこのような正規職員を同僚保育士とする）。一方、障害児への対応を行う加配や補助的な保育士は非正規職員であることが多い（本章ではこのような非正規職員をフリー保育士とする）。転勤があり、市の職員としての意識がある同僚保育士と、転勤がなく、同じ園で長期間働いているフリー保育士の存在は、二人のような若手保育士が初めて幼児担任を任された際に大きな分岐点となりえる。保育園の組織として、正規職員である若手保育士がクラス担任で保育を主導していくことが求められるが、園の文化としては、数年ごとに転勤がある正規職員に対し、非正規職員は 5 年、10 年と同じ園で勤務していることから、たとえば、「結構、ベテランやフリーの先生が助けてくれる（マツリ、1 回目）」が一方で、「フリーの先生が強く、やりたいことが覆される（ミナ、1 回目）」こともあり、まだ経験年数が 3 年目の保育士として、経験年数の長いフリー保育士がどのような人物なのかは、重要な要素となっている。

D：子どもを集団としてみる

このような園文化の中で、幼児担任として「時間と子どもを自分がひっぱっていく（マツリ、2 回目）」ことが求められてくる。つまり「担任保育者として保育を上手くまわす」ことが二人の大きな課題としてあがってくる。もちろん、ここには同僚保育士やフリー保育士と安定的な人間関係を形成し、また、子ども集団も上手くまとめられることが必要になる。

そのため、担任保育士として子どもをまとめ、伸ばしていくことが求められてくるが、経験年数の長い同僚保育士やフリー保育士は「（子どもの気持ちを）掴むのが上手い（マツリ、5 回目）」ので、「教えてもらうとかすごく勉強になった（ミナ、5 回目）」という。

経験年数の長い同僚保育士やフリー保育士から、子どもをまとめていくためのやり方を学んでいくなかで、実際に自身もそれを模倣して行うようになっていく。もちろん、子どもたち一人ひとりの育ちを大事にしていきたいという葛藤も感じるのだが、「話を聴けないクラスって言われるのは凄いいや（ミナ、6 回目）」という他の保育士から自分が担当するクラスへのまなざしに配慮しなければならない。

幼児担任になった二人は、同僚保育士やフリー保育士とともに保育を行いながら、彼女たちのベテランとしてのうまさやそこに付随する価値観を学んでいく。その際に、二人の保育行為スタイルの分岐に大きく影響を与えたのが、それぞれを取り巻く園文化としての人的環境である。ミナ先生の周りには、「今まで育ててもらった先輩が体育会系のタイプが多く（ミナ、2 回目）」、「教えられてきた先輩も、時間を無駄にしてはいけないという考え方（ミナ、7 回目）」の保育士が多かった。また、園自体も、「自由にやっていいみたいな、環境があまりない（ミナ、6 回目）」なかで、これまでの園の雰囲気を踏襲することが求められていた。一方、マツリ先生は「（パートは）同じ部屋に何年もいるじゃないですか（だから）たてつかないほうがいい（マツリ、8 回目）」と感じつつも、「フリーの手が空いていれば、全体にフリーが入って、態勢を整える（マツリ、6 回目）」ことができる援助的なフリー保育士とともに働き、園自体も「園長も思っていることはあるけど、あまり言わない。言わないから好き勝手やって（マツリ、7 回目）」いける園文化のなかにあった。

これだけが分岐に影響しているわけではないが、どのような園文化の保育園に配属されるのか、また、どのような同僚保育士、フリー保育士とともに組むことになるのかは、保育

行為スタイルの分岐に大きく影響を与えているのではないかと考えられる。

Ｅ：模倣した保育行為の気づきから身体知化へ

一緒に働く保育士の子どもへの関わり方を模倣し、保育を上手く回していけるようになるなかで、それらの行為を意味づけていくようになる。

ミナ先生は、上述したように 2–3 年目に「体育会系のタイプ」に指導されていることから、「自分も（子どもが）もっとやればできる、行事に向かっていく（のがいい）（ミナ、7 回目）」と感じている。つまりミナ先生は、子どもたちの力を信じ、なるべく伸ばしてあげたい、潜在的な力をもっと顕在化させていきたいと考えている。

一方、マツリ先生は、「できない子たちがイヤになっちゃわないレベルで持ち上げていくか（マツリ、8 回目）」を基準にしている。そのため、「できる子は物足りない（マツリ、8 回目）」かもしれないと述べている。

二人はすぐにこのような考え方に浸透するのではなく、ミナ先生はもっと子どものペースに合わせていきたい、と感じることもあるし、マツリ先生はもう少しできることを増やしてあげたいとも感じることもあるが、このようなゆらぎのなかで、徐々に園の雰囲気や一緒に働く保育士から受けている価値観を身体知化していくのである。

Ｆ：園文化をまとう（Second-EFP）

リサーチクエスチョンである保育行為スタイルの分岐への要因は、最初に配属された園や一緒に教わった先生という文化的な要因が大きいことが明らかになった。それはまた二人の語りから、子どもや一緒に働く保育士との安定的な関係を構築し、園の中での自身の立ち位置を明確にしていく、という園文化の中での「サバイバル」があると考えられる。よって、本研究では 2nd EFP として、「園文化をまとう」ことを、研究を進めながら設定した。

このような文化的分岐点と設定した外在的な差異について、4 年目の終わりにミナ先生は「パートさんに振り回された、影響が大きい 1 年だった（ミナ、10 回目）」と述べ、マツリ先生は「（パートからすごい助けられた、ただただ助けてもらう感じですごいやりやすかった（マツリ、11 回目）」と述べていることからも理解できる。

公立保育園といえども、一つひとつの園には園文化としての差異があり、そこで働き続ける保育士にとって、その園のやり方に順応し、その園文化の方法に熟達化していくことは当然である。その園文化をまとっていくプロセスのなかに、保育行為スタイルの分岐プロセスもまた含まれていることが考えられる。

４）まとめ

本研究では、上田（2017）から保育行為スタイルの分岐がどのように形成されていくのかを、公立保育園に勤務する 3 年目の保育士 2 名に対して、3 年間の縦断的なインタビューを行うなかで明らかにしようとした。その結果、保育行為スタイルの分岐に対しては、一緒に働く保育士や園文化のありかたが強く影響しており、外在的文化的な要因が大きく影響していることが明らかになった。

一方で、本研究では 2 名の保育士の語りを対象にしたため、たとえば、最初から強く信念をもっているような保育士や男性保育士では状況が異なっているかもしれない。また、こういった園文化に馴染めない保育士は、異なる保育行為スタイルを模索するというよりも、離職をすることも考えられる。異なるライフコースの保育士の語りを含めて検討していくことが今後の課題となる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 上田敏丈，秋田喜代美，芦田宏，小田豊，門田理世，鈴木正敏，中坪史典，野口隆子，箕輪潤子，椋田善之，淀川裕美，森暢子	４．巻 26
２．論文標題 事業継承における私立幼稚園園長のリーダーシップに関する研究	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際幼児教育研究	６．最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大豆生田 啓友、平野 麻衣子、岩田 恵子、上田 敏丈、吉川 和幸、榎沢 良彦	４．巻 56
２．論文標題 2. 保育フォーラム	５．発行年 2018年
３．雑誌名 保育学研究	６．最初と最後の頁 229～244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.56.3_229	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上田敏丈・中坪史典・吉田貴子・土谷香菜子	４．巻 5
２．論文標題 実践知としての保育者の「見守る」行為を解読する試み　ー当事者の語りに着目してー	５．発行年 2017年
３．雑誌名 子ども学	６．最初と最後の頁 223-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上田敏丈・川喜田奈保	４．巻 28
２．論文標題 幼児の造形表現行為の変容過程に関する実践的研究	５．発行年 2017年
３．雑誌名 人間文化研究	６．最初と最後の頁 155-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 藤井真樹，勝浦眞仁，上田敏丈
２．発表標題 保育者が実感する遊びの成立に関する研究（２）ーA保育園の築山遊びからー
３．学会等名 日本発達心理学会 第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 勝浦眞仁，藤井真樹，上田敏丈
２．発表標題 保育者が実感する遊びの成立に関する研究（１）ーA保育園の築山遊びからー
３．学会等名 日本発達心理学会 第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 野口隆子，淀川裕美，鈴木健史，松嵜洋子，上田敏丈，中坪史典，埋橋玲子，
２．発表標題 保育者の深い学びを支える園内研修
３．学会等名 日本発達心理学会 第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 上田敏丈
２．発表標題 保育行為スタイルの視点による保育者の専門性発達
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 荻原はるみ，勝浦眞仁，上田敏丈，
２．発表標題 初任保育者の障害のある幼児に対する配慮の実践知に関する研究ー環境調整における「偶発的気づき」に着目してー，
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 上田敏丈，加藤望，松山有美
２．発表標題 保育実習日誌から読み解く養成校学生の学びプロセス
３．学会等名 日本保育士養成協議会総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 上田敏丈
２．発表標題 保育者の保育行為スタイル分岐に関する研究ー二人の保育者の語りからー
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 勝浦眞仁，荻原はるみ，上田敏丈，
２．発表標題 障害のある幼児に対する深みのある配慮とはーSCATによる保育者の暗黙知の読み取りー
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 上田敏丈・中坪史典・肥田武・中田周作・吉田貴子
２．発表標題 保育者の保育行為スタイルとしての「見守る」に対する小学校教諭の認識に関する研究
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 上田敏丈・荻原はるみ・勝浦眞仁
２．発表標題 障害のある幼児の記録から保育者は何を読み取るかーSCATによる実践知解読の試みー
３．学会等名 日本教育心理学会第59回総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 上田敏丈・吉田貴子・中田周作・肥田武・中坪史典、
２．発表標題 小学校教諭は保育における「見守る」ことをどのようにとらえているのか？ー活動のねらいに着目して
３．学会等名 子ども社会学会第24回大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計7件

１．著者名 入江礼子、小原敏郎	４．発行年 2019年
２．出版社 萌文書林	５．総ページ数 232
３．書名 子どもの理解と援助　子ども理解の理論及び方法	

１．著者名 中坪史典編著	４．発行年 2019年
２．出版社 Ratik	５．総ページ数 440
３．書名 複線径路・等至性アプローチ（TEA）が拓く保育実践のリアリティ	

１．著者名 安田裕子・サトウタツヤ 編著	４．発行年 2020年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 200
３．書名 保育，看護，臨床・障害等の直接的対人援助のプロセスの記述	

１．著者名 中坪　史典	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 352
３．書名 テーマでみる保育実践の中にある保育者の専門性へのアプローチ	

１．著者名 吉田貴子、水田聖一、生田貞子	４．発行年 2018年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 216
３．書名 保育の原理	

１．著者名 上田敏丈	４．発行年 2017年
２．出版社 風間書房	５．総ページ数 156
３．書名 保育行為スタイルの生成・維持プロセスに関する研究	

１．著者名 吉田貴子、水田聖一、生田貞子	４．発行年 2018年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 216
３．書名 保育の原理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考